

「末期癌患者の診療マニュアル 痛みの対策と症状のコントロール」第2版

Therapeutics in Terminal Cancer

RG Twycross・SA Lack 著
武田 文和 訳

Dr. Twycross と Dr. Lack の共著による「Therapeutics in Terminal Cancer」の second edition が出版され、武田文和先生の名訳により、「末期癌患者の診療マニュアル」第2版として世に出されたことは誠に喜ばしい。1987年に訳出された第1版は非常に評判がよく多くの専門家に読まれた。癌性疼痛に関する論文には必ずといっていいほど引用された。

近年日本においてもターミナルケアに対する関心が高まり、末期癌患者の痛みをはじめとする不快な症状をコントロールする方法について学ぼうとする姿勢が少しずつではあるが医師の間にもみられるようになってきた。しかし、まだまだこの分野に関心を示す医師の数は多くなく、多くの末期患者が苦しみと痛みの中で死を迎えているというのが現状で

あろう。

このような状況の中で、本書が出版されたことは誠に時宜を得たものといえる。第2版では第1版より更に記述が充実されている。例えば、閉塞性リンパ性浮腫(末期癌にはしばしばみられ、そのコントロールが難しい)に関する章が新しく設けられている。痛みのコントロールの章ではオピオイドに反応する痛み、ある程度反応する痛み、オピオイドに抵抗する痛みに分けた記載がされている。更に、最もコントロールが困難であるとされている痛覚求心路遮断による痛みについては第1版よりかなり詳しく述べられている。

武田先生の訳はわかりやすく親切である。Dr. Twycross と協議して補正し、あるいは訳注をつけたと訳者序にあるが、実際この訳注がとても役に立つ。薬剤名も、一般名と共

に商品名も挙げられているので実地医家には大きな助けである。また、「麻薬」という言葉を使わないでオピオイドにするなど、訳者の細かい配慮が本の随所に見受けられる。

癌に対する集学的治療の発展にはめざましいものがあり、早期発見、早期治療により癌は治る病気になりつつある。しかし、それと同時に、発見が遅れ、治療がうまくいかないと、死に至る病いであることも確かである。それも、かなり苦痛を伴う死であるといえる。ホスピスにおいて、多くの癌患者を看取っていて思うことは、人々は死を覚悟できても、死ぬまでの苦痛はなかなか覚悟できないということである。先日もある患者が、「先生、私は死ぬことは覚悟できています。しかし、苦しくて死ぬことはいやです。どうか、痛みや苦しみはなんとかとってください」と言った。予後を知っている患者の共通の願いであると思う。

本書が多くの医師、ナース、その他、癌の臨床に従事する人々に広く読まれることを願っている。

(淀川キリスト教病院副院長・ホスピス長)
柏木 哲夫

●A5変型 266頁 図13 表65
1991年 定価2,266円 円300円

医学書院 刊(☎03-3817-5657)